



【上映作品】

監督エドワード・ヤン

『ヤンヤン 夏の思い出』

2000年 / 173分 / ヴィスタ / カラー

【トークゲスト】

安井豊作 映画批評家、「カイエ・デュ・シネマ・ジャポン」元編集委員

荻野洋一 映画批評家、「カイエ・デュ・シネマ・ジャポン」元編集委員

稲川方人 詩人、映画批評家、「カイエ・デュ・シネマ・ジャポン」元編集委員

*追加ゲストの予定あり

梅本洋一 Umemoto Yoichi
パリ第8大学大学院映画演劇研究所博士
課程修了。映画雑誌カイエ・デュ・シネマ・ジャ
ボン代表(一九九〇〜二〇〇〇)。横浜国立大
学大学院都市イノベーション研究院院長・教授
(二〇一〇〜二〇一四)。
著書に『映画は判つてくれない』(ライオン社)、
『映画はわれらのもの』(青土社)、『映画をつな
ぎとめるために』(勁草書房)、『サツシヤギトリ
——都市、演劇、映画』(勁草書房)、『映画
が生まれる瞬間』(勁草書房)、『映画旅日記』
(青土社)、『建築を読む』(青土社)など多数。
訳書に『セフレ・マクフライド』(監督ハワード・ホ
ークス、映画)を語る』(青土社)、ジャン・ドゥーシェ
他『パリ、シネマ』(ライオン社)、セルジュ・ダネー
『不屈の精神』(ライオン社)、パスカル・ボニエ
ル『金形するフレーム』(勁草書房)など多数。

追悼 梅本洋一

1953-2013 | 映画批評家・「カイエ・デュ・シネマ・ジャポン」初代編集長

映画批評 現在と 並走すること

nobody
www.nobodymag.com

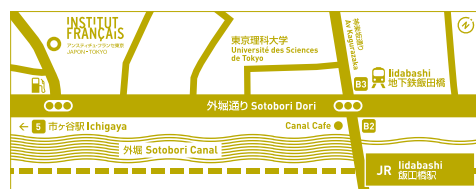
「上映トーク」 カイエ・デュ・シネマ・ジャポン以後の 映画批評をめぐる真夏の夜

【日時】2013年8月24日(土)

【開場】1530 【上映】1600-1900 【トーク】1915-2030

【会場】アンステイチュ・フランセ東京 エスパス・イマージュ [新宿区市谷船河原町15]

【入場料金】1,500円(当日会場にて「nobody issue 39」同時購入の場合:1,000円)



【追悼 梅本洋一】

映画批評＝現在と並走すること カイエ・デュ・シネマ・ジャポン以後の 映画批評をめぐる真夏の夜

『ヤンヤン 夏の思い出』（エドワード・ヤン監督）上映＋トークイベント

2013年3月に急逝した映画批評家・梅本洋一が創刊した映画批評誌「カイエ・デュ・シネマ・ジャポン」は、「現代の映画」をめぐる思考を原動力とする雑誌だった。現在時制において映画と人は、映画と世界は、あるいは映画と批評は、どのように関係を紡ぐことができるのか。90年代を走り抜けたこの雑誌が見出した数多くの映画作家たち、映画批評家たちは、今もなおその問いを継続している。

わたしたちはここから、どのように映画とともに生きていくことができるのか。梅本洋一が「カイエ・ジャポン」誌上で最後に記した批評の中で、「現在進行形の世界を思考する映画」として絶賛した『ヤンヤン 夏の思い出』の上映とともに、「カイエ・ジャポン以後」の新たな旅を模索する夏の一日をお送りする。

『ヤンヤン 夏の思い出』 *Yi Yi: A One and a Two* [2000年/173分/ヴァスタ/カラー]

監督・脚本 エドワード・ヤン(楊徳昌) 撮影 ヤン・ウェイハン(楊渭漢) 編集 チェン・ポーウェン(陳博文)

出演 ウー・ニエンチェン(呉念真)、エレイン・ジン(金燕玲)、イッサー・尾形、ケリー・リー (李凱莉)、ジョナサン・チャン(張洋洋)

【あらすじ】 祖母、父と母、娘と息子。3つの世代によって構成された現代台北に暮らすひとつの家族。祖母が脳卒中に倒れたことをきっかけに、それぞれがさまざまな変化へと身を投げ込むことになる。その混乱のさなか、8歳の少年・ヤンヤンはやがてカメラを手に、彼の身の回りの人々の背中を撮り始める……。第53回カンヌ国際映画祭にて監督賞を受賞した本作は、2007年に逝去したエドワード・ヤン監督の実質的な遺作となった。

【トークゲスト・プロフィール】

安井豊作 Yasui Hosaku

映画批評家・映画作家・映画批評集団「シネ薔」主宰。著書に『シネ薔 炎上す』(以文社)、監督作品に『Rocks Off』(制作中)がある。

荻野洋一 Ogino Yoichi

映画批評家・映画作家・映像制作。監督作に『ウィリアム・テロル、タイ・ブレイク』(94)がある。

稲川方人 Inagawa Masato

映画批評家・映画作家・詩人・編集者。著書に『反感装置 Splash book』、『詩的間伐一対話 2002-2009』、『詩と、人間の同意』(ともに思潮社)、など、監督作品に『たった8秒のこの世に、花を』画家・福田知佐子の世界』(04)がある。



エドワード・ヤン追悼

梅本洋一

[……]数年経って京都で彼に会った。京都映画祭でのことだ。チャンバラ映画のシンポジウムに君は参加していたね。ぼくはティエリー・ジュス、坂本安美と一緒にいた。最終日の夜、ホテルの部屋の電話が鳴った。「一緒に話す時間がなかったね。明日の朝食を一緒にしよう」。朝食を共にしながら、君は、映画を撮ることの経済的な困難さについてずっと話していた。「誰も金を貸してくれないんだ」と君は繰り返していた。

そう映画を撮ることは難しい。そして、君のような映画の場合、その困難さは倍増するだろう。ぼくが大金持ちだったら。ぼくは素朴にそう思ったことを覚えている。

そして、それから数年後のカンヌ映画祭の授賞式をモニターにかじりついてライブで見ていた。その年は青山真治の『ユリイカ』やオリヴィエ・アサイヤスの『感傷的な運命』など、ぼくの友人たちの作品が一挙にコンペに出た年だ。君の『ヤンヤン 夏の思い出』もその一本だ。君は監督賞を受賞した。すごく嬉しそうだった。満面の笑みという言葉があるけれど、あの日の君の表情はまさにそれだ。君がスピーチで何を言ったかは忘れた。でも万感こみ上げてくるような君の表情だけは今でもとてもよく覚えている。

そして、五反田の試写室で『ヤンヤン 夏の思い出』を見たのが、その夏の夜のこと。感動した。そこに出てくる父子の姿はちょうど息子を持ったばかりのぼく自身であるような気がした。エドワードも子どもが生まれたばかりだったと言う。ぼくもすごく映画を撮りたくなった。

そのとき以来、ぼくは君の消息を知らない。若い友人たちが君の特集を雑誌でやりたいと言ってきたとき、ぼくは君からもらったメアドや電話番号を彼らに伝えただけで、返事はなかったという。君が重い病気だという噂や、実は元気に君が尊敬している手塚治虫の原作でアニメを撮っているという噂。いろいろ聞いていた。

そして君が死んだというのは噂ではないらしい。ぼくは君の新作をいつも楽しみにしていた。そして、何年かに一度突然かかってくる君からの電話がもうかかってこないことがとても寂しい。とても寂しい。

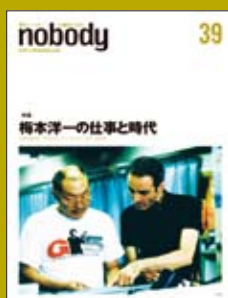
www.nobodymag.com (2007/07/02) より

「カイエ・デュ・シネマ・ジャポン」 *Cahiers du Cinéma Japon*

仏映画批評誌「カイエ・デュ・シネマ」との相互協力のもと、梅本洋一のリーダーシップにより、1991年に創刊された映画批評誌。第1期には特別号含む計18号をフィルムアート社より発行、「映画の21世紀」という副題の冠された第2期は計15号を勁草書房より発行。梅本洋一を筆頭に、稲川方人、樋口泰人、荻野洋一、青山真治、佐々木敦、安井豊、坂本安美、大寺真輔、彦江智弘、阿部和重、廣瀬純など、現在も活躍する多くの映画作家・批評家が編集・執筆陣に名を連ねた。



「ヤンヤン 夏の思い出」DVD発売中
発売元 Y2K映画製作委員会
販売元 ポニーキャニオン
価格 ¥3,990 (税抜価格¥3,800)
© 2000, 1+2 Seisaku linkai



季刊「ノーバディ」最新号

nobody issue 39

特集 梅本洋一の仕事と時代

Umemoto Yoichi, sa vie et son temps

黒沢清「リアル〜完全なる首長竜の日〜」

ベン・リヴァース「湖畔の2日間」

ニコラス・レイ「We Can't Go Home Again」

追悼 大島渚 ほか

定価 1,575円 (税込)

全国書店・ミニシアターなどで発売中!

nobody オンラインショップでも絶賛取扱中!

企画・運営 nobody編集部

お問い合わせ contact@nobodymag.com

*アンスティチュ・フランセ東京ではなく、上記へお問い合わせ下さい。

f www.facebook.com/nobodymag

@nobodymag

会場・協力 アンスティチュ・フランセ東京

*アンスティチュ・フランセ東京会員割引・招待券・ポイントカードのご利用は出来ません。チケットは当日14:30より会場で販売いたします。全席自由、整理番号順での入場とさせていただきます。

nobody
www.nobodymag.com

INSTITUT
FRANÇAIS
アンスティチュ・フランセ東京
JAPON・TOKYO